

日本語教育の観点から見た日本語の IT 用語の特徴

濱田美和・深澤のぞみ

The Characteristics of Japanese IT Terminology from the Viewpoint of Japanese Language Education

HAMADA Miwa, FUKASAWA Nozomi

要 旨

IT 技術が広く普及したことにより、IT 用語は PC 操作以外の日常的な場面でも頻繁に使われるようになった。また同時に、日本語力を有する外国人 IT 技術者のニーズが世界的に高まるなど、様々な目的で、日本語の IT 用語の習得が、仕事や学習、また生活に不可欠なものとなってきている。そこで本稿では、普通の生活で接することの多い新聞や雑誌などの印刷物やテレビ放送を資料として用い、頻出する IT 用語を抽出して、日常生活に深く浸透してきた IT 用語の特徴を明らかにした。具体的には、語の出現度数や語種、ともに用いられる動詞や複合語としての用いられ方を分析した。それをもとに、一般の日本語教育の中で早くから扱う必要があることを提案し、日本語教育の中での取り上げ方についても考察した。

【キーワード】 日本語の IT 用語、日常への浸透、一般語化、日本語教育

1 はじめに

近年、IT は日常のあらゆる場面で使用されるようになり、日本で生活する外国人にとって、大学などでの学習・研究上ではもちろんのこと、職場や日常生活上でも、IT に関する知識は不可欠のものである。また、IT 企業などで、外国人高度人材や現地とのブリッジ人材として活躍する IT 技術者の必要性が高まっているとも言われ、高い日本語力だけでなく、日本語での IT 知識が求められる場合も多くなった。

非日本語母語話者が日本語環境の IT 機器を使用する際に問題となるのが、日本語の IT 用語である。PC の操作自体には慣れている者にとっても、PC のメニュー等が日本語で表示された場合、使用効率が低下したり、正確な操作に困難が生ずることがある。深澤・濱田・後藤（2003）では、日本語学習者の IT 機器の使用を支援するために、日本語環境の PC 画面に表示される用語を調査分析し、用語集の開発を行った。しかしその後、IT 技術はさらに一般に普及し、日常生活の中で目にすることが増えたため、PC 操作のための用語集の開発だけでは不十分となり、日常生活における重要語として、早くから一般の日本語教育の中で採り入れることが必要だと考えるようになった。

そこで、濱田・深澤（2007）では、日常接する様々なタイプの文から抽出した日本語の IT 用語、延べ 6567 語（異なり 841 語）をもとに、専門語としてだけではなく一般語化した IT 用語にどのような語があり、そしてそれらがどのような特徴を持つかを探った。この結果、(1) インターネットおよびメールに関連する語が多いこと、(2) カタカナ表記の外来語の占める割合が高いこと、(3) IT 用語として新たに作られた語と、既存語に新たに IT の意味を付加した語とが混在していること、(4) 表記が定まっていない語や省略語が多いことが確認できた。

本研究では、新たに 2011 年 6 月までに発行された印刷物やテレビ放送も資料に加えて、さらに用例数を増やして検討した。特に高頻度語彙を中心に文中での現れ方にも注目して考察した。

2 調査方法

IT に関連する用語および使用文例を、表 1 に挙げた資料から採集した。

表1 用例採集リスト

新聞	朝日新聞 2007年2月10日朝刊, 北日本新聞 2006年11月27日朝刊, 向學新聞 2007年1月1日, 日経流通新聞 2011年4月18日・2011年6月1日, 読売新聞 2007年8月10日朝刊
雑誌	ODAIBA MOOK en-taxi No.19, CanCam 2007年3月号, 月刊シナリオ 2011年2月号～6月号, 月刊『ドラマ』2011年5月号, サライ 2006年12号, 日経ビジネス 2006年9月11日号, Newton 別冊「性を決める X と Y」, 文芸春秋 2007年2月臨時増刊号, 留学交流 第18巻 第11号
小説	『人生ゲーム ある日ぼくの会社がなくなった』中川淳一郎著, 『隣の若草さん』藤本ひとみ著
一般教養 実用書 など	『下流社会 新たな階層集団の出現』三浦展著, 『患者さんにはちょっと言えない 医者の世界の「お約束」』富家孝著, 『9割がよくある病気』山田恵子著, 『師匠断』浜美雪著, 『14歳の心理学』香山リカ著, 『つっこみ力』パオロ・マツァリーノ著, 『脳のからくり』竹内薫・茂木健一郎著, 『はじめよう! 気持ちのいい暮らし』河野真希著, 『人はなぜ簡単に騙されるのか』ゆうきとも著
コミック	『エンジェル・ハート』15 北条司著, 『美味しんぼ』96・97 雁屋哲・花咲アキ著, 『うちがいちばん』4・5 秋月りす著, 『OL 進化論』25・26・30・31 秋月りす著, 『のだめカンタービレ』16・17・18・20・22・24 ニノ宮知子著, 『ピアノの森』11～19 一色まこと著
広報 情報誌	CLUB ふみたん 2011年6月号, 広報とやま 2006年11月20日号・2011年5月20日号, 大和友の会ニュース 2011年6月, とやま市議会だより 2011年5月5日, 富山情報 2007年2月14日号・2011年5月18日号, 納税富山 平成18年11月20日発行, 花日和 2007年2-3月号, FAVO フェアポ 2011年6月号, プリュ Vol.228
広告	北日本新聞, マリエとやま (ショッピングセンター), ダイワロイネットホテル富山トヤマ, アーバンシティ富山堀川町 (マンション), アパグループ (マンション), サーパスシティ中央通り (マンション), お届けガスト (弁当宅配), ヤングドライ (クリーニング), 音楽学校 MI ジャパン金沢校, 東京アカデミー (学校), エンジャパン (人材派遣会社), 株式会社アクトニッチ 在宅スタッフ募集, 日本旅行チケット用封筒, 北陸鉄道高速バス
ガイド ブック	地球の歩き方ポケット 06-07 ホーチミン (旅行ガイド), TVガイド 2006年11月4日～10日, 平成18年度富山大学五福キャンパス教養教育ガイド, 2006 富山大学キャンパスガイド
カタログ	郵便局の通販ショップカタログ, 日本ランズエンド 2006年レディス冬号・2011年5月商品カタログ (婦人服), FANfan2007vol.53 (化粧品), レポート笠間新聞 2006年5月13日・10月7日 (書籍), 岩波書店の新刊 2007年2月, 渥美書房 国語・国文学 文献目録 No.84, 富山市立図書館 増加図書目録 No.296
各種案内 通知 説明文 など	2006 富山大学授業案内 五福キャンパス 教養教育・二年次生用, 富山大学中央図書館フロアマップ & クイックガイド 2011, 読書週間書店くじ平成18年, 日本言語学会の今後の活動について, 文部科学省共済組合グループ保険事業案内, 第48回外国人による日本語弁論大会実施要領, 山陽新幹線車内案内, JR 西日本ネット予約案内, 富山地方鉄道「定期券 (通勤) の郵送サービス案内」, 楽天アドキッチン 送料 Free 案内, 株式会社ガリバー 購入者へのお知らせ, 日本ランズエンド 受付時間等案内, 北陸電力リビングサービス「オール電化住宅の案内」, 北陸電力 電気料金等領収書, DAISO 富山 CiC 店 領収書, クロネコヤマト不在連絡票, クロネコヤマト伝票, 佐川急便富山店 不在連絡票, ゆうパック 不在連絡票, (株) バンダイ キャンディ袋・シールシート, (有) 女傳商会「いか黒作り」外箱, 不二家ミルククッキー 外箱, 共立食品株式会社 製菓材料パッケージ, 無印良品「ドライフルーツ」パッケージ, カタギ食品株式会社「有機いりごま」パッケージ
テレビ 放送	NHK ニュース原稿 (NHK の動画ニュースサイト「NEWS WEB」に2011年5月～6月に掲載された255原稿), TBS ニュース原稿 (TBS の動画ニュースサイト「Newsi」に2011年5月～6月に掲載された47原稿), KNB ニュース原稿 (KNB のニュースサイト「KNB WEB」に2011年5月に掲載された4原稿), このほかに2008年4月以降に放送された70のテレビ番組 (ニュース・報道, 情報・ワイドショー, 趣味・教育, バラエティー・音楽番組) および42のテレビCM
その他	第20回第一生命サラリーマン川柳コンクール「100句」, ワールドオンラインストア アンケート, NHK 公式ホームページ (トップページ)

* 下線は、濱田・深澤 (2007) 以降に新たに収集した資料を示す。

日常生活に浸透した IT 用語を観察するという観点から, IT を専門的に扱う書籍等は対象から外し, できるだけ幅広いジャンルから収集するよう心がけた。冊子類については 2005 年以降に発行されたもので, 商品パッケージや領収書などは 2006 年以降に入手したものである。また, 本調査では新たにテ

テレビ放送も資料に含めたが、これについては2011年に放送されたNHKとTBSのニュース（インターネット上にニュース原稿が掲載）が中心で、それ以外は2008年以降にテレビの視聴中に耳にしたIT用語を随時書き留めていったものである¹⁾。

上記の資料から、延べ12487語（異なり1142語）のIT用語を抽出した。語の認定においては、IT用語辞典（『IT用語辞典 e-word』（<http://e-words.jp/>）, 『最新パソコン用語事典』（技術評論社）における見出し語として掲載の有無などを参考にした。なお、外来語については、例えば「ウェブ」と「Web」のようにカタカナ表記のものとローマ字表記のものがあるが、IT用語ではローマ字表記の語も多く見られ、非日本語母語話者にとってはローマ字表記の語は理解できてもカタカナ表記の語は理解しにくいというケースもよくあるため、別の語として分析を行うことにした。そのほかに、「コンピューター」と「コンピュータ」、「ウイルス」と「ウィルス」のような表記上の違いは、IT用語に限らずよく見られるものであり、実際の発音上の違いはほとんどないため、同一の語として処理した。漢語と和語についても、漢字で表記されたものと仮名で表記されたものがあり、漢字で表記される場合は送り仮名のつけ方に違いが見られるものもあるが、これらも同一の語として分析した²⁾。

3 分析結果と考察

3.1 出現数および語種

まず、異なり1142語全体の傾向を見ていこう。図1に出現数別、図2に語種別の内訳を示した。

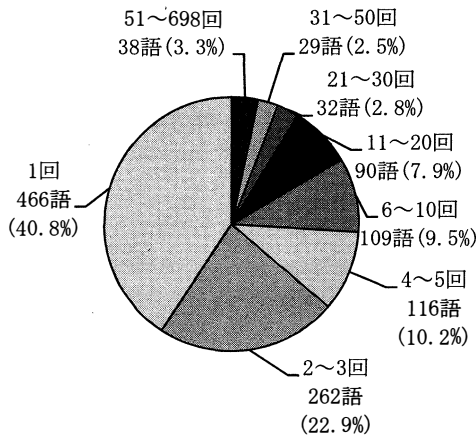


図1 異なり1142語の出現数別内訳

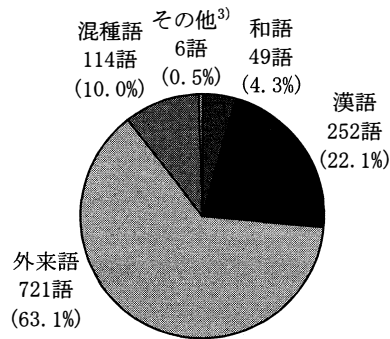


図2 異なり1142語の語種別内訳

図1から、語によって出現数にかなり差があることが分かる。出現数51以上の語は38語あるが、このうち出現数が101以上の語は19語あり、さらにその中の9語は出現数が201以上となっている。IT用語を扱った辞典類では見出し語として数千語が掲載されている⁴⁾が、日常生活で頻繁に用いられる語はかなり限定されるようだ。

図2から、語種については、外来語が全体の3分の2近くを占めており、外来語の占める割合が非常に高いと言える。外来語にはカタカナ表記とローマ字表記の語があるが、外来語721語のうちカタカナ表記の語は581語あり、日本語のIT用語の習得においては、いわゆるカタカナ語が鍵となることが改めて確認できた。

なお、濱田・深澤（2007）での異なり841語に関する分析結果と比較すると、出現数⁵⁾、語種⁶⁾ともに似たような分布を示しており、今回の調査で異なり語として新たに301語が加わったが、全体的な分布傾向には大きな変化は見られなかった。

3.2 高頻度語

次に、出現数が多かった語について、どのような特徴を有するかを見ていく。出現数31以上の67語を表2にまとめた。

表2 出現数が多かった語（出現数31以上の67語、括弧内は出現数を示す）

1位. インターネット (698)	24位. オンライン (88)	47位. ウェブ (ウエブ) サイト (43)
2位. 携帯 (ケータイ, ケイタイ) (536)	25位. 入力 (81)	47位. ダウンロード (43)
3位. パソコン (487)	26位. アドレス (80)	49位. NTT (42)
4位. ホームページ (483)	27位. クリック (77)	49位. ファイル (42)
5位. 携帯 (ケータイ) 電話 (でんわ) (449)	28位. PC (76)	49位. フェイスブック (42)
6位. メール (434)	29位. QRコード (71)	49位. モバイル (42)
7位. サイト (401)	30位. 書き込む (書き込み) (70)	49位. 液晶 (42)
8位. ネット (314)	31位. E-mail (e-mail) (69)	54位. 掲示板 (40)
9位. 検索 (225)	32位. Web (WEB, web) (68)	55位. グーグル (39)
10位. コンピュータ (一) (197)	33位. ドコモ (61)	55位. 読み取る (読取, 読み取り) (39)
11位. アクセス (195)	34位. Eメール (eメール) (59)	57位. ハイビジョン (37)
12位. システム (167)	34位. スマートフォン (59)	57位. パスワード (37)
13位. URL (url) (138)	34位. 画像 (59)	57位. ひな型 (37)
14位. 画面 (136)	37位. セキュリティ (一) (54)	57位. 機能 (37)
15位. ソフト (134)	38位. 動画 (53)	57位. 操作 (37)
16位. 個人情報 (120)	39位. ネットワーク (50)	62位. サーバ (一) (35)
17位. 配信 (105)	40位. コンテンツ (49)	63位. プチコード (34)
18位. IT (104)	40位. 登録 (49)	64位. GPS (33)
19位. データ (101)	42位. KDDI (48)	64位. ツイット (一) (33)
20位. ブログ (98)	42位. 電子メール (48)	64位. データベース (33)
21位. HP (hp) (95)	44位. PHS (47)	64位. 端末 (33)
22位. DVD (94)	45位. デル (46)	
22位. デジタル (94)	46位. ワープロ (45)	

67語の語種を見ると、外来語が48語(71.6%)、漢語が15語(22.5%)、和語が3語(4.5%)、混種語が1語(1.5%)となっており、高頻度語についても外来語と漢語が中心となっている。

出現数が最も多かったのは「インターネット」であるが、4位に「ホームページ」、7位に「サイト」、8位に「インターネット」の略語の「ネット」、13位に「URL」、20位に「ブログ」、21位に「ホームページ」のアルファベット表記からの略語の「HP」、32位に「Web」というように、全体的にインターネット関連語が非常に目立つ。

2位の「携帯」は、漢字表記とカタカナ表記の用例があり、その内訳(テレビ放送からの音声のみのデータ61例を除く)は「携帯」が277例、「ケータイ」が189例、「ケイタイ」が9例であった。「携帯」と同義の「携帯電話」も5位に入っているが、これは漢字表記の用例が398例と大半を占め(テレビ放送からの音声のみのデータ48例を除く)、仮名表記の用例は「ケータイ電話」が2例、「携帯でんわ」が1例であった。また、「携帯」の類義語の「スマートフォン」が34位、「PHS」が44位、「モバイル」が49位に、「携帯」と関わりの深い語として「QRコード」が29位、「ドコモ」が33位に入っている。

このほか、3位の「パソコン」についても28位に同義語の「PC」、10位に類義語の「コンピュータ(一)」があり、さらに、6位の「メール」については31位に「E-mail」、34位に「Eメール」、42位に「電子メール」というように複数の同義語がある。表2にまとめた67語の中には、同義語、類義語が多く含まれている。

濱田・深澤(2007)の結果と比較すると、前回の調査では15位であった「検索」が今回は9位と、上位10位内に入っている。新しく採集した用例の中には、広告などで会社や店の案内を行う際に、「 」「 」のような形で表示される例が多く見られ、以前からなされていたURL掲載に代わり、キーワード検索の形での表示がここ数年の間に普及したことが、この理由の1つとして考えられる。また、前回収集した資料にはなく、今回新しく出現した語として、「スマートフォン」と「フェイスブック」と「ツイット(一)」がそれぞれ34位と49位と64位に入っている。これらは(括弧内の数字は出現数、以降、同様に記す)、「スマホ」(2)、「facebook」(2)、「twitter」(5)といった略語や英語表記のまま用いられている例も見られた。出現数30以下の語の中にも、「SNS」(15)、

「ソーシャル（・）ネットワーク」(6),「ソーシャルネットワークサービス」,「ソーシャル（・）ネットワーキング・サービス」(5),「ワンセグ」(10),「タブレット型」(6),「クラウド」(3),「クラウドコンピューティング」(2) など、ここ数年の間に新たに耳にするようになった IT 用語が含まれていた。

3.3 文中での現れ方

教材化に際しては、各語が実際に文中でどのように使用されるのか、どのような語と結びつきやすいのかという情報が必要である。本稿では、今回の調査で 201 以上の用例を採集できた表 2 の上位 9 位までの語、すなわち、「インターネット」「携帯」「パソコン」「ホームページ」「携帯電話」「メール」「サイト」「ネット」「検索」を取り上げ、文中での現れ方を見ていく。

9 語はいずれも名詞であるが、このうち漢語サ変動詞としての用例があったのは、「検索」(32) と「メール」(9) と「携帯」(1) の 3 語であった。1 つ目の「検索」は、情報通信機器での操作を表す語であり、文中で用いられる場合は述語成分としての使用が中心であったが、3.2 で述べたように、新たな収集資料の中にはキーワード検索の表示として、「(キーワード) 検索」(78) という使用例が非常に多かった。2 つ目の「メール」については、漢語サ変動詞としての用例も一定数見られたが、「メールを送る」(23) のように「送る」を述語に取る用例のほうが多かった。また、「メールをする」(3) という用例も見られた。「メール」以外に、ヲ格名詞として「する」を述語に取る用例が見られたのは、「インターネット」(2) と「ネット」(1) の 2 語だけであった。3 つ目の「携帯」については、漢語サ変動詞としての用例は「マナーと一緒に携帯しましょう」という公共の場での携帯電話の使用への注意を促す広告のキャッチコピーの例のみで、これはかなり特殊な例と言えるだろう。

このように「検索」以外の 8 語については、文中で用いられる場合は格成分としての使用が中心である。そこで、これらの 8 語が、ヲ格名詞、ニ格（へ格）名詞、デ格名詞として現れる場合に用いられる動詞を表 3 にまとめた。

表 3 出現数 201 以上の高頻度語とともに用いられやすい動詞（出現数 3 以上、括弧内は出現数を示す）

	Nを…	Nに／へ…	Nで…
インターネット	使う(24), 利用する(9)	接続する(5), 公開する(3)	申し込む(16), 購入する(10), 販売する(8), 調べる(8), 公開する(7), 見る(5), 検索する(5), 呼びかける(5), 請求する(5), 受け付ける(3), 紹介する(3), 予約する(3), 中継する(3)
携帯	使う(3), 見る(3), 開く(3), 発売する(3)	出る(6), 送信する(4), 電話する(3)	アクセスする(8), チェックする(4), 連絡する(4), 撮る(3), 利用する(3), 受け付ける(3)
パソコン	使う(22), 持つ(5), 利用する(4), 押収する(3)	向かう(10), 配信する(4), ある(3)	見る(4), 検索する(3), 実施する(3)
ホームページ	見る／ご覧になる(41), 参照する(7), 確認する(3)	掲載する(17), ある(6), 書き込む(3), アクセスする(3)	紹介する(13), 確認する(12), 公開する(12), 検索する(4), 公表する(4), 宣伝する(4)
携帯電話	使う(10), 持つ(7), 見る(4), 手にする(4), 利用する(4), 切る(3), 活用する(3), 奪う(3), 取り出す(3)	配信する(5), 送る(3)	読み取る(4), 連絡する(4), 送る(3), 登録する(3), 利用する(3)
メール	送る(23), 見る(6), 受け取る(5), 打つ(4), 送信する(4), する(3), 忘れる(3), 配信する(3)	記載する(3)	知らせる(11), 申し込む(6), 送る(5), 連絡する(5), 伝える(3), やりとりする(3), 応募する(3), 予約する(3)
サイト	見る／ご覧になる(7), 運営する(5), 作る(4), 利用する(4), 立ち上げる(3)	アクセスする(22), 掲載する(6), 公開する(4), 書き込む(3), 載せる(3), 誘導する(3)	知り合う(7), 紹介する(4), 閲覧する(3), 公開する(3)
ネット	—	書き込む(3)	調べる(6), 販売する(5), 予約する(5), 変更する(4), 楽しむ(3)

表3において、8語がヲ格名詞として取る動詞を見ると、「見る」(61)、「使う」(59)、「送る」(23)、「利用する」(21)が多く出現していることがわかる。「見る」については「ホームページ」「サイト」「メール」「携帯電話」「携帯」の5語で、「使う」については「インターネット」「パソコン」「携帯電話」「携帯」の4語で、「送る」については「メール」で、「利用する」については「インターネット」「パソコン」「携帯電話」「サイト」の4語で出現数3以上となっている。8語がニ格(へ格)名詞として取る動詞を見ると、「アクセスする」(25)と「掲載する」(23)が多く、いずれも「ホームページ」と「サイト」の2語で出現数3以上となっているが、「アクセスする」は「サイト」、「掲載する」は「ホームページ」で多く出現している。8語がデ格名詞として取る動詞を見ると、「申し込む」(22)と「公開する」(22)と「紹介する」(20)が多く、「申し込む」については「インターネット」「メール」の2語で、「公開する」と「紹介する」については「ホームページ」「インターネット」「サイト」の3語で出現数3以上となっている。

表3の動詞の中には、「アクセスする」「検索する」「書き込む」「配信する」のように、IT用語として取り上げられる語もあるが、そうでない語も多い。そしてその中には、「見る」「使う」「送る」のように、日本語教育では基本語彙に含まれる語もあるが、「掲載する」や「公開する」のような日本語能力試験1級レベルの難易度の高い語もあり、注意を要する。

3.4 複合語

表2の上位9位までの語、「インターネット」「携帯」「パソコン」「ホームページ」「携帯電話」「メール」「サイト」「ネット」「検索」は、いずれもこれらの語を構成要素とする複合語の形での使用例が多く見られた。9語それぞれについて、どの程度の割合で出現しているのかを算出したところ、表4のようになった。

表4 複合語の形での出現数と割合

	複合語の形での出現数 / 総出現数	%
サイト	237 / 401	59.1
ネット	158 / 314	50.3
検索	80 / 225	35.6
ホームページ	157 / 483	32.5
携帯	159 / 536	29.7
インターネット	167 / 698	23.9
メール	98 / 434	22.6
パソコン	76 / 487	15.6
携帯電話	66 / 449	14.7

表4から、特に「サイト」と「ネット」の2語が、複合語の形で出現する割合が高いことがわかる。「サイト」は「Webサイト」、「ネット」は「インターネット」の略語である。「携帯電話」とその略語である「携帯」についても、「携帯電話」が複合語の要素として出現した割合は14.7%であるのに対して、「携帯」はその2倍の29.7%となっている。

複合語の構成要素となる場合、「サイト数」のように最初の要素となる場合と、「自殺サイト」のように最後の要素となる場合、そして「携帯電話サイト会員」のように途中の要素となる場合とがある。9語について、複合語の要素として出現する場合にどの位置で出現しているのか、それぞれの出現数とその割合をまとめたのが表5である。

表5 複合語中での出現位置

	最初の要素として出現		途中の要素として出現		最後の要素として出現		計	
	出現数	%	出現数	%	出現数	%	出現数	%
サイト	3	1.3	9	3.8	225	94.9	237	100.0
ネット	132	83.5	7	4.4	19	12.0	158	100.0
検索	37	46.3	26	32.5	17	21.3	80	100.0
ホームページ	33	21.0	7	4.5	117	74.5	157	100.0
携帯	123	77.4	1	0.6	35	22.0	159	100.0
インターネット	157	94.0	5	3.0	5	3.0	167	100.0
メール	34	34.7	6	6.1	58	59.2	98	100.0
パソコン	74	97.4	1	1.3	1	1.3	76	100.0
携帯電話	53	80.3	1	1.5	12	18.2	66	100.0

表5から、「パソコン」「インターネット」「ネット」「携帯電話」「携帯」については、複合語の最初の要素として、反対に、「サイト」「ホームページ」については、最後の要素として出現する用例の占める割合が非常に高いことがわかる。「メール」も最後の要素として出現する用例数が半数を上回っているが、最初の要素としての用例数も全体の3分の1近くを占める。複合語の途中の要素として出現する用例が比較的多いのは「検索」だけである。

複合語の最初の要素、複合語の最後の要素としての出現例を示したのが表6である。複合語の途中の要素としての出現例には、「検索」については「予約検索サイト」「病院検索サイト」「インターネット検索大手」「蔵書検索画面」、ほかの語については「便利サイト情報」「住基ネットシステム」「学会ホームページ掲載」などがあつた。

表6 複合語としての出現例（括弧内は出現数を示す）

	最初の要素としての出現	最後の要素としての出現
サイト	サイト数(2)、サイト開設(1)	携帯サイト(31)、出会い系サイト(16)、検索サイト(9)、キャンペーンサイト(7)、交流サイト(7)、自殺サイト(7)、動画投稿サイト(7)、インターネットサイト(5)
ネット	ネット通販(16)、ネット会員(8)、ネットオークション(7)、ネットショップ(6)、ネット配信(6)、ネットカフェ(5)	住基ネット(6)、雑誌ネット(4)、同窓会ネット(1)、JRおでかけネット(1)、よみうり求人ネット(1)、ゆうどきネット(1)、みてネット(1)
検索	検索機能(10)、検索サイト(9)、検索ワード(4)	キーワード検索(3)、蔵書検索(3)、店舗検索(3)
ホームページ	ホームページアドレス(27)、ホームページ作成(3)、ホームページデザイン(1)、ホームページ掲載(1)、ホームページ限定(1)、ホームページ関係(1)	番組ホームページ(9)、公式ホームページ(6)、オフィシャルホームページ(4)、市ホームページ(4)、当社ホームページ(3)、下記ホームページ(2)
携帯	携帯サイト(31)、携帯メール(8)、携帯画面(5)、携帯ストラップ(2)、ケータイ待受(2)	〇〇専用携帯(4)、カメラ付き携帯(2)、GPS携帯(2)、QRコード対応携帯(2)、スリム携帯(2)
インターネット	インターネットカフェ(10)、インターネット検索大手(9)、インターネットサービス(8)、インターネット通販(7)、インターネットサイト(5)、インターネット関連(5)	高速インターネット(2)、多機能インターネット(1)、機内インターネット(1)、おまかせインターネット(1)
メール	メール相談(4)、メールサービス(3)、メール交換(3)、メール会員(3)、メール拒否(1)	携帯メール(8)、誕生日メール(3)、返信メール(3)、GPSメール(3)、社内メール(2)、新着メール(2)
パソコン	パソコン画面(12)、パソコンソフト(9)、パソコン向け(4)、パソコンユーザー(1)	高機能パソコン(1)
携帯電話	携帯電話会社(8)、携帯電話市場(4)、携帯電話サービス(3)、携帯電話対応(1)	カメラ付き携帯電話(4)、GPS機能付き携帯電話(1)、多機能携帯電話(1)

表6の出現例を見て気づくのは、「インターネット」と「ネット」について、「ネット」は「インターネット」と比べて複合語の最後の要素としての用例の占める割合がやや高かった(表5)が、実際の例を見ると、「JRおでかけネット」や「ゆうどきネット」のように、特定のWebサイト名を示す固有名詞としての使用例が中心である。「インターネット」ではこのような使用例は見られなかった。一方、複合語の最初の要素としての用例については、「インターネット通販」と「ネット通販」、「インターネットカフェ」と「ネットカフェ」のような同義語が見られる。IT用語には略語が多いが、もとの語と略語との間で複合語の構成の仕方が異なる場合があり、この点についても教材化の際に配慮が必要であると言える。

また、IT用語にはカタカナ表記の外来語と漢字表記の漢語が多いが、これらが複合語の要素として用いられた場合、「オフィシャルホームページ」や「多機能携帯電話」のようになり、非日本語母語話者にとってはどこで語を区切ればよいか、その語構成の把握すら困難なケースもあり得る。そして、3.3のIT用語とともに用いられる動詞と同様に、IT用語が複合語を構成する際に、構成要素として結びつく語についても、同じIT用語の場合と一般語の場合とがある。一般語の場合でも「投稿」や「オークション」などの日本語能力試験の級外語、「掲載」や「限定」などの1級レベルの語といった日本語教育の面から難易度の高い語も多く、これらへの対応も考える必要がある。

4 まとめと日本語教育への応用

以上から、日常目にするIT用語の種類は多いが、出現数が多く、日常生活に浸透している語はある程度限定されることがわかったため、日本語学習の早い段階から指導に取り入れていくことが効果的であると言える。しかし一方で、数年の間に新しい用語が出現して、出現数の上位に入ってくるような変化の速さもあり、指導の場での見極めが重要となる。

頻出するIT用語はカタカナ表記の外来語が中心であること、しかし同時に、「ケータイ」と「携帯」、「メール」と「Eメール」「電子メール」のように同義語の表記には漢字が含まれている場合もあることが確認され、十分整理した上での提示が必要であることがわかる。カタカナ表記の外来語の大半は英語由来の語であり、PC操作に慣れている者は、原語を知っている可能性が高いが、「サーバ(一)」「ブログ」のように原語の発音とかなり異なる語、「ネット」や「サイト」や「メール」のように原語とは意味のずれが生じるもの、さらには「ワープロ」「QRコード」のように原語には存在しない語もあり、日本語の語彙として学び直さなければならないものも多い。

またIT用語とともに用いられる動詞を分析したところ、「見る」「使う」「送る」「利用する」といった日本語学習の初級レベルの語が多く、日本語教材での例文提示などにIT用語を入れ込むことができる可能性が示唆された。それに対し、「アクセスする」「検索する」「書き込む」「配信する」のようなIT用語に特有なもので頻出する動詞は、通常の日本語教科書では扱われることが少ないので、意識的に導入することが必要となるだろう。

さらに、複合語として用いられるIT用語が多いことも、注目すべきである。その用語を単独で出すより、日頃目にしやすい複合語の形を意識させることも、その後の応用に役立つ可能性がある。

このように、IT用語であっても、様々な形で日常的に使われ、一般語化してきているものについては、ITが日常の一部になっている今、積極的に日本語教材の中に組み込んでいき、そのほかの頻出語についてはITの専門分野の基礎語彙として整理して提示することが求められると考える。

今後は、日本語学習者の習得状況についての調査を行い、日常的なレベルでも、専門的なレベルでもITが必要とされている時代にふさわしい教材化へとつなげていきたい。

注

- 1) 音声データのみを用例の表記については、同一番組中でテレビ画面にテロップでの表記があった場合はそれに合わせる形としたが、文字情報が何もない場合は収集したほかのデータの表記にそろえた。
- 2) 濱田・深澤(2007)では、「携帯」と「ケイタイ」と「ケータイ」は別の語として分析を行ったが、今回の調査では音声データのみ資料も含めることによってこれらの区別が難しくなったため、同一の語として分析を行い、表記について触れる際には、印刷媒体から収集したデータのみを対象とした。
- 3) 日本の企業名について、その由来が不確かなものがあり、これらを「その他」に分類した。
- 4) インターネット上で随時更新されている『IT用語辞典 e-word』(<http://e-words.jp/>)では2011年7月15日現在、見出し語として7460語が挙げられている。
- 5) 濱田・深澤(2007)の異なり841語の出現数別内訳は、出現数21以上が58語(6.9%)、11～20が68語(8.1%)、6～10が70語(8.3%)、4～5が82語(9.8%)、2～3が202語(24.0%)、1が361語(42.9%)であった。
- 6) 濱田・深澤(2007)の異なり841語の語種別内訳は、和語が33語(3.9%)、漢語が200語(23.8%)、外来語が529語(62.9%)、混種語が79語(9.4%)であった。

参考文献

- (1) 後藤寛樹・深澤のぞみ・濱田美和(2002)「コンピュータ用語のデータベース作成と特徴の分析－留学生の情報活用能力の養成を目指して－」『富山大学留学生センター紀要』創刊号, pp.3-14
- (2) 濱田美和・深澤のぞみ(2007)「IT用語の日常への浸透と習得」第4回日本語教育とコンピュータ(CASTEL-J)国際会議(於, 米国・ハワイ大学カピオラニ校), 『CASTEL/J 2007 Proceedings』, pp.197-200
- (3) 濱田美和(2008)「情報セキュリティ・情報モラル教育に関わる日本語の用語の分析」『富山大学留学生センター紀要』第7号, pp.1-14
- (4) 深澤のぞみ・濱田美和・後藤寛樹(2003)「『留学生のためのコンピュータ用語集』の開発」『専門日本語教育研究』第5号, pp.45-50